大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

九州西部における隠れキリシタン後裔の花文化：墓地の植物文様を中心として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004388

九州西部における隠れキリシタン後裔の花文化

― 墓地の植物文様を中心として ―

大　形　　徹

はじめに

2011年9月18日から25日まで、長崎県（長崎、五島、平戸、黒島ほか）、福岡県（太刀洗）で植物関連の調査をした[1]。今回の地域はとくにキリスト教と関係が深い。そのため、キリスト教に関わる植物の調査となった。その際、実際にそこにある植物だけではなく、キリスト教の教会や墓地にみえる各種の装飾にあらわれる植物文様の調査を行った。私の役割分担は文化方面とくに墓地の植物文様であった。墓地の文様は、当初、簡単なものであったが、その後、やや複雑なものになる。植物に関するものもいくつかあらわれる。キリスト教の教義に関わるものは教会建築にみえるものと関連する。それはまた、幕末から明治にかけての長崎の西洋建築の装飾にも共通するものがある。ただし、墓石に関しては、作り手の石工が仏教寺院の墓石を手がけていることもあり、意匠や装飾にその影響があらわれているとみなせるものもあった。

キリスト教では、復活信仰が大きな意味をもっている。その観点から見たときにそこに使用されている植物も復活観念と関連づけられているものが多い。拙稿では、おもにその観点から考察している。口頭発表は、2011年12月3日に「照葉樹林文化研究会2011 in Osaka」（大阪府立大学学術交流会館）でおこなったが、拙稿はそれをもとに加筆したものである。

一、植物由来の装飾文様

アロイス・リイグル著『美術様式論：装飾史の基本問題[2]』は、エジプトの睡蓮に由来する植物文様であるパルメット文が、どのようにして広がっていき、ヨーロッパの文様を形作っていったかについて考察した書物である。ここでは、篠塚千恵子「エジプト・メソポタミア・ギリシア・ローマの文様」から引用する。

ロータスの形状は、A. リーグル(『美術様式論』長広敏雄訳座右宝刊行会 昭和18年)によれば正面形、側面形、半正面形に分けられ、正面形がロゼット、半正面形がエジプト式パルメットにあたるという(挿図３)。側面形では、壁画の貴婦人の頭飾に見られるような、三つの萼の間からいくつかの先端の尖った花弁が突き出た形(挿図４)が最も一般的であるが先端がやや渦をなしながら左右に開いた萼の間から一つの楕円状の花弁がのぞくという様式化された形もある。この略式タイプはユリの花に似ている[3]。

「先端がやや渦をなしながら左右に開いた萼の間から一つの楕円状の花弁がのぞくという様式化された形」は図１[4] から、中央の放射状に開いた花弁と両端のしずくの部分をとり去った形である。以下の図ではロータスの蕾の横に描かれているものに相当するだろう。ロータスの蕾の下はロゼッタである。リイグル（リーグルとも）の説によれば、いずれもロータスにもとづくことになる。これは墓の装飾に使用されている。

リイグルの『美術様式論』の中では、「パルメットと側面形ロータス花との交互対置をなす内部装飾[5] 」（図２[6] ）は「パルメット」[7] と呼ばれている。図３[8] はパルメット部分のみを切り取ったものである。

この形はキリスト教に関わる装飾文様の中で随所にみることができる。今回、調査した長崎の教会や墓地の装飾文様の中にも数多くある。1908年に作られた旧野首教会[9] では左右に配置されている（図４[10] ）。なお中央上部の十字架の先端、および天主堂の文字上部の十字架の先端、さらには入り口のアーチの上部の形も、この変形とみなすことができるように思われる。

キリスト教では、この形はユリと解釈されている。「キリスト教では、ユリは清らかな処女の愛を象徴する花となった。受胎告知の天使ガブリエルはたいていユリを手にした姿で描かれ、養父ヨセフや、聖母マリアの両親ヨアキムとアンナもまた、しばしばユリとともに描かれる。イエスは「山上の説教」において、「野のユリ」〔「マタイによる福音書」（６:28)、ただし新共同訳では「野の花」〕は「働きもせず、紡ぎもしない」が、何ら疑いを抱くことなく一心に神を信じている点を賛美している。 このためユリは、パドヴァの聖アントニウス、聖ドミニクス、聖フィリッ・デ・ネーリ、聖ウィンケンティウス・フェレリウス、シエナの聖カタリナ、聖フィロメナなどの聖人の持物となった[11] 」とされ、ユリは非常に重要な植物である。

しかしながら、「ユリはシンボルとしてその意味が明確に定まる以前からすでに非常に重んじられており、古代エジプトやミノス文明期のクレタ島、さらにはミュケナイにお

いて、装飾のモチーフとして好んで用いられた[12]」と、キリスト教以前から使用されている。さらには、ロータスにもとづくエジプト式パルメットに関して、「この略式タイプはユリの花に似ている[13]」とされている。文様図案化（図５）[14] されたものは、とくにロータスとユリのイメージが重層的なものとなっている。

ロータスは睡蓮のことである。睡蓮と呼ばれるのは開花した花が夜には閉じ、水中に沈み、翌朝、再び水から顔をだして開花するからである。それを花が睡眠すると捉えたのであろう。エジプトでは開花後、夜に水の中に沈むことを擬似的な「死」と考え、翌朝再び開花することを「復活再生」と捉えたのであろう。そのため、睡蓮そのものがミイラに捧げられ、それにもとづく文様も復活再生の意味をこめたものとして使用されたのであろう。復活再生が、再びこの世に復活することなのか、あるいは、あの世に再生することなのかは判然としない。しかし、墓のもつ本来的、根源的意味は、いつの日か復活再生することを期して遺体を保存することにあると思われる。事実はどうであれ、宗教的な確信として、そのことは受け継がれてきたのであろう。

キリスト教で復活思想[15] が重要であることは、いまさら、ここで繰り返すまでもないだろう。リイグルはパルメットの宗教的な意味をほとんど強調せず、装飾文様の伝播の歴史として考察している。けれども文様が伝播していく推進力としてパルメットのもつ復活再生観念の果たした役割は大きく、それが名称を変じて、「ユリ」と呼ばれた場合にも、その観念そのものは、しっかりと受け継がれていったのではないだろうか。

二、幕末から明治にかけての建築にみる植物文様

ヨーロッパのさまざまなものに装飾文様として植物が使われている。幕末から明治にかけて長崎あたりに建てられた西洋建築の中にある暖炉、家具等にも多くの装飾文様をみることができる。それらは日本で作ったというよりもヨーロッパから、そのままもちこまれたものも多いだろう。ここでは一例のみ紹介する。グラバー園の旧三菱第２ドックハウスの鋳物製の暖炉（図６・７）上部左右隅に、その形にあわせた植物の組み合わせ文様が造形されている。『世界の文様２　エジプト・ギリシア・ローマ・メソポタミア[16]』に紹介されるギリシア・ローマあたりの蔓草状文様の流れをくむものであろう。まわりには連珠文のような文様が、二重に施されている。

三、九州西部の教会にみえる植物文様

九州西部にはキリスト教の教会が数多くある。『大いなる遺産 長崎の教会―三沢博昭写真集[17] 』には、平戸・佐世保・長崎地区のものが24、五島地区のものが28、福岡のものが２、熊本のものが３紹介されている。それらのうち、現存しないものが７、建て替えられたものが６ある[18] 。天文18年（1549）にフランシスコ・ザビエルがもたらしたキリスト教は、天正15年（1583）に豊臣秀吉によって、バテレン追放令が出された。その後、慶長元年（1596）に、スペイン船、サン・フェリペ号事件を契機として、牧師、信者をあわせて26名が処刑された[19] 。慶長18（1613）年に徳川家康により、禁教令が出された。その後、潜伏キリシタンの時代をへて、明治６年（1873）に禁教令が解かれ、キリスト教の信仰は復活した。それにともない、カトリック教会は数多く造られるようになった。

その中で、とくに注目されるのが、鉄川与助（1879. １. 13～1976. ７. ５）の存在である。川上秀人「長崎の教会建築史[20] 」によれば、かれは34の教会を設計している。かれ自身はキリスト教徒ではない。建築家とされてはいるが、もとは大工であった。ただし、建築学会主催の講演会にも参加しており、川上秀人は「棟梁建築家鉄川与助」と定義している。鉄川は設計にあたり、ペルー神父（Albert-Charles-Arsene Pelu、1848. ３. 30～1918. ）、フレノ神父（Pierre-Theodre Fraineau、1847～1911. ）、ド・ロ神父（Marc-Marie de Rotz、1840. ３. 26 ～1914. ）などと関わっている。かれはヨーロッパに渡航したこともないため、当初は神父の意見をかなり入れて、設計していたのであろう。

教会の内陣は、聖職者以外、立ち入りが禁じられているところである。カトリック教会では、そこにも植物文様が使われていることが多い。これらの植物文様はいずれも、以下に考察するように、キリスト教の歴史と深い関わりをもつものである。また、あとの表でとりあげたが、鉄川与助の設計による教会には植物文様が意識して使われている。

これらの植物文様はグラバー邸などの幕末から明治期に建てられた洋風建築の植物文様にも似ている。けれども、教会独自のものもいくつかある。それらを以下にとりあげる。

コムギ

小麦の図柄は教会の内陣の木彫の中に数多くみえる。ここでは神ノ島教会のものをあげる（図８[21] ）。

「小麦ble …小麦は、多くの実を結ぶために地に落ちて死ぬ種であるキリスト自身を表す（ヨハ一二：二四）[22] 」。また、「小麦は小麦粉となり、小麦粉からパンが作られる

が、パンは聖体の秘跡においてキリストの体となる（マタ二六：二六、マコ一四：二二）[23]」とある。

小麦はブドウと組み合わされることが多い。これは、ブドウ酒（ワイン）とパンが、キリストの血と肉を暗示する事につながる。復活思想と関連するであろう。

ブドウ

ブドウの図柄も教会の内陣の木彫の中に数多くみえる（前掲、図８）。ブドウはワインの原料であり、ワインはキリストの血とされている。

「中世ヨーロッパの図像では、キリストはブドウの木に、使徒たちは枝に喩えられることが多い。十字架や「生命の樹」もしばしばブドウの木として描かれ、またブドウの収穫は、世界の終わりにおける最後の審判を象徴する[24]」とされる。

また、ヒルデカルトは、「穀物やブドウは人間の目に見えない発芽を促す神秘的な力（＜緑の力viriditus＞）によって成育する[25]」と述べている。これについて「キリスト教の秘跡において、パンとブドウ酒がキリストの血と肉に変化するのも、ブドウ酒のもつこの力の作用によるものであり[26]」とされ、さらにヒルデカルトの語として、「このような意味としてブドウ酒は大地の新たなる液体なのであり、そのうちには死と生とがやどっている[27]」とされている。

つまり、ブドウは樹木、酒のいずれもがキリスト教の中で意味をもつものとして使用されており、キリスト教の「復活」観念と結びつけられたものだとわかる。

シュロ（棕櫚（ナツメヤシ）palmier）　附ソテツ

シュロの図柄も教会の内陣の木彫の中に数多くみえる（図版９[28]）。「ドイツ語のPalmeは〔広義ではヤシ科の植物全体をいうこともあり、また日本では伝統的に「シュロ」の訳語をあてることも多いが〕絵画や文学においては、たいていナツメヤシDattelpalmeのことを指している[29]」と本来はナツメヤシである。

「①古代世界では、棕櫚の枝は勝利のシンボルである。…②そうした伝統はキリスト教でも継承され、棕櫚の枝は死に対する勝利、復活、不死のシンボルとなった。棕櫚の木は、新しい命の木であるキリストの十字架を表す[30]」とみえる。シュロ〔ナツメヤシ〕には「復活」「不死のシンボル」「新しい命の木」というイメージがある。

長崎などの教会では、ほとんどすべての教会の庭にソテツが植えられていた。ここでは黒崎教会のものをあげておく（図10[31]）。ソテツの葉とシュロ〔ナツメヤシ〕の葉はよく似ている。ソテツはシュロ〔ナツメヤシ〕の代用品であるようだ[32]。シュロ〔ナツ

メヤシ〕のもつ「復活」「不死」「新しい命」といったイメージもソテツに受け継がれているのかもしれない。

バラ　附ツバキ

「ばら（薔薇）Rose　その美しさ、香気、形態の神秘のために昔から高く評価された。色彩が主として赤であるために太古から愛の寓意とされる。キリスト教神秘主義のイコノグラフィーでは、キリストの血を受け止めた鉢あるいはこの血の滴の変容あるいはキリストの傷そのものを示す。この象徴表現に属するものには、聖杯の鉢ならびにダンテの『神曲』の天上のばら（rosa candia）がある[33]」とされる。

長崎の五島は椿の産地として有名なところである。またキリスト教と関わる椿の伝説もある。「長崎巡礼センター公認」と記す『巡礼スタンプ帳』に「椿のバスチャン伝説[34]」が紹介される。「江戸時代の初期に殉教した外海の伝道師バスチャンが白いツバキの大木に指先で十字を印すと十字架が浮き出てきた。そのときからキリシタンの聖なる木となる[35]」とみえる。案内の方の手引きで「殉教者茂重翁の碑」がある神社附近の山を探索したが、その椿らしきものはみつからなかった。

また「鉄川与助氏制作の教会だけに使われている白椿の花の模様。頭ヶ島・田平・紐差・細々（ママ）流・江上等、外海からの移住者達の集落の教会です[36]」とある。要するに白椿と十字架が結びつけられているのである。さらに中ノ浦教会の折り上げ天井の説明に「赤い椿の花模様[37]」とみえ、これもまたツバキとされている。

五島観光歴史資料館[38]に展示されている細石流教会[39]の四瓣の白い花の木彫（図11[40]）について、「細石（さざれ）流教会　椿十字型の木製レリーフ」と「椿十字」という説明書きがつけられている。

ところが奇妙なことに、「長崎巡礼センター認可」となっているもう一冊の巡礼帳には、椿にまつわる部分がすべて消され、「バラの花」とされているのである（図12[41]）。二冊の巡礼帳にはどちらも発行年が記されていないが、表紙に、わざわざ「Rose」と書いてある「長崎巡礼センター認可」の方が新しいと判断した。つまり、旧パンフで椿とされていたものが、新パンフでは野バラに戻されているのである。おそらくキリスト教の教義とツバキとは本来、関係がないということで野バラにもどされたのであろう。このことは今回の五島調査を企画した山口裕文東京農業大学教授が詳しく報告する予定である。ここでは簡単に指摘するだけにとどめたい。

ただ、もともと白い野バラであったものが紅になり、五瓣であった花びらが十字架にあわせてか、四瓣にデザインされるようになって、ますます、椿に似るようになってい

ることは確かである。また天草のキリスト教会では椿が聖樹として、とらえられているという 。しかし、福岡の教会のものは、椿の産地ではないため、野バラのままである。

この話は二つの視点からとらえられる。ひとつは植物学的観点から、野バラの方が正しかったのが、誤って椿と伝えられたのか、ということ。もうひとつは文化習合という観点から、受け入れ先にそれを受け入れる要素（椿の産地）があったから、自然とそうなったということである。さきにみたシュロ（＝ナツメヤシ、キリスト教由来の植物）とソテツ（九州によく見られるソテツの葉に似た植物）の関係にも似ている。

ロザリオロード

ロザリオは、十字架をぶら下げる数珠のようなものである。ここでは白い一重のバラの生け垣が数珠のような形でゲートになっている（図13[43] ）。

アカンサス　Akanthus

「地中海地域で多く目にするあざみに似た深く羽状に裂けた披針形の葉を持つ植物（キツネノゴマ科）。古代ギリシアでクラッシック期以来広く普及した建築装飾の要素で、コリント様式の柱頭を特徴づけている。…墓地の建造物に多く認められるので、アカンサスを不死と結びつける象徴主義がここに根ざしている。ロマネスク美術にきわめて強調して受けつがれ、しかも教会の内陣の柱頭によく用いられている。というのはそこは復活が約束されている聖人の遺物が所蔵されており、また永遠のキリストなる観念によって支配されているからである[44] 」。ここでは堂崎天主堂の柱頭を紹介する（図14[45] ）。

パルメット（ロータス文様、ユリ）と百合十字（花十字）

パルメット文様についてはすでに紹介しているので繰り返さない。ここではパルメットが十字架の上についた形である百合十字について考察する。頭ヶ島教会の天井部分に植物のような文様がある。これは鉄川与助の設計になるものだが、図15[46] は百合十字が二つ組み合わされ、図16[47] はロゼッタになっている。百合の部分のみは「Fleur de lis（ユリの花）」と呼ばれている。「百合十字は、十字の４つの先端に、紋章の図案として単純化したユリの花をあしらった形をしたもので、十字の下端のみが鋭くとがった形のもある。百合十字は、1156年にカスティーヴァ王国で創立された戦闘的なアルカンタラ騎士団の紋章である[48] 」。1609年建築とされる長崎のサント・ドミンゴ教会跡資料館[49] の瓦（図17[50] ）に、この形の軒丸瓦が展示されており、その説明には、「花十字」と記されている。1780年刊、エドマンドソン『紋章学辞典[51] 』第２巻の21にもあげられている。

クローバー十字（図18[52]）、トロース十字（トゥールーズ十字）（図19[53]）、錨十字（図20[54]）にも似ている。クローバー十字は、４方向のそれぞれの先に三つ葉のクローバーがついた形である。「キリストの十字架と三位一体の徴が結合したものとして象徴的に解釈される[55]」とキリスト教の三位一体[56]としてとらえられている。

さきにみたように、ユリは実際の百合にはあまり似ておらず、スイレン（lotus、Nymphaea、water lilies）にもとづくパルメットの変形である。この形の十字架は先端にパルメット文がついていると解釈できるだろう。紀元前の中央アジア、パジリクの墓の副葬品にパルメットが四つあわさった文様（図21[57]）がある。これはやはりエドマンドソン『紋章学辞典』の12（図22[58]）の原形のようにみえる。日本の家紋にも影響を与えているようで、花轡久留須[59]（図23）から○を取り去ったものがよく似ている。cross patones（パトーンズ）（先端が葉の形のクロス）[60]とされているが、何の葉なのかという説明はない。

十字架には、さまざまなバリエーションがあるが、その原形がキリスト教よりも古いところに求められるものも多い。「車輪十字」とされるものは、十字を円で囲んだ形であるが、「４本の輻の車輪十字：古くからある（アジアの諸民族とゲルマンにおける）光と太陽の象徴で、キリスト教以前に遡る。同時に、歳月の流れと人生（車輪）の象徴でもある。キリスト教美術では、世界に光りと力をもたらすキリストの象徴でもある[61]」とされている。メソポタミアには太陽を円と十字にあらわしたものがある[62]。

「熊手十字、悪人十字」と呼ばれるものは、「…後者の場合は、はるかに古い象徴的意味をもち、生命の木（樹）を示している[63]」とされる。また「把手十字（crux ansata）：元来はエジプトのヒエログリフのankh（生命）に由来するもので、昇る日輪によって大地が活気づき、豊かになることを示す。古代のエジプトの図像には、生命の水の徴としてしばしば登場する。キリスト教化したエジプト人（コプト）から、キリストの十字架の持つ生気を与える力の徴として受けつがれた[64]」とみえる。これをみると、把手十字と呼ばれる十字架にエジプトの影響があったとわかり、「エジプト十字[65]」と呼ばれることもあったようだ。とくに「キリスト教化したエジプト人（コプト）から、キリストの十字架の持つ生気を与える力の徴として受けつがれた」の部分は異なる文化が習合していく例として捉えることができるだろう。

ほかに「スワスティカ（俗に）鉤十字」と呼ばれるものは、「（４つの逆さまのギリシア鉤rからできているのでcrux　gammata）：最初はアジアで、次いでゲルマン民族（スカンディナヴィアでは「雷神の槌」）で太陽の徴とされたもので、その起源は非常に古い。仏教では天国の鍵の徴。ロマネスクの装飾では、悪魔に対する防御手段であるメアンダーと結びつけられた。そのほか多くの文化に流布している円運動の象徴でもある。初期キ

リスト教時代のフレスコ、石碑上に、十字架の象徴として姿を見せることがある。ロマネスク時代のキリストの描写に添えられた場合には、創造された階級と秩序γで周りを円状に囲まれた「創造の渦」がしばしば思い起こされる[66]」。

キリスト教文化の成熟の中で十字架にはさまざまな意味が付与されていくことになる。しかしながら、キリスト教が生まれる以前に、すでにその形が存在し、そこにには、さまざまな象徴的意味が込められていた。「光と太陽の象徴（車輪十字）」や「ヒエログリフのankh（生命）に由来するもので、昇る日輪によって大地が活気づき、豊かになることを示す（熊手十字）」、「太陽の象徴（スワスティカ（俗に）鉤十字）」と太陽や生命と結びつけられている。沈んだ太陽は翌朝また昇る。象徴としての太陽は復活観念を含んでいると思われる。

四、九州西部のキリスト教墓地の墓石にみる植物文様

今回、長崎、五島、黒島、福岡のいくつかのカトリック教会をたずね、教会に隣接する五箇所の墓地を観察した。ここでは植物文様がどのように使われているのかについて着目したい。

長崎などのキリスト教墓地には日本式の墓石の上に十字架が載った和洋折衷の墓石が林立している（図24[67]）。キリスト教式の墓は1600年前後につくられたものが少しある。その後、キリスト教が禁止され、キリスト教式の墓は作ることができなくなる。この潜伏キリシタン[68]の時代には、墓参りの際、近くにおいていた石を並べて十字架を作るなどのことがされていた。このことはカトリック出津教会の野道墓地を調査[69]している時にうかがった。つまり、墓石に直接、十字架があらわされることはなかったのである。現在でも石を十字架の形に並べただけの墓をみることができる（図25[70]）。レンガやコンクリートブロックを並べたもの（図26[71]）は、その変形であろう。横に積まれている丸石は本来、並べて十字架を作るために用いられていたものかもしれない。

明治６年（1873年）に禁教令が解かれた。墓に十字架をつけることも可能になったと思われる。調査した中では明治14年のものがもっとも古かった。初期の墓は小さい。また墓石は立てられていない。墓石は地面に敷かれるように平らにおかれている（図27[72]）。それがしだいに日本式の墓の形へと変容していき、その過程で墓石の最上部に小さな十字架が載るようになる。墓石に直接、十字架を刻すものもある。墓石の上の小さな十字架はフランスの墓地でもみることができる（図28[73]）。外国のデザインなのだろう。明治期の墓石には植物文様はみえない。新しいものに植物文様が十字架を囲むものがある

（図29-a[74]）。十字架を中心として、それを盛りたてているようにみえる。またコムギ（図29-b）、ブドウ（図29-b）などがみえる。日本のカトリックの教会の内陣の装飾に共通するようだ。いずれも先に考察したようなキリスト教的な象徴である。なお十字架は百合十字にデザインされているものが多い。

石工のデザイン感覚

キリスト教徒の墓地は仏教徒の墓地と混在することはない。別の場所にある。しかしながら、墓石を加工する石工は、キリスト教の墓のみを作っているわけではない。仏教徒の墓も作っている。黒島の石材店のパンフレット（図30[75]）をみれば、日本式の墓石とキリスト教の墓石の両方が見本として載せられている。墓石の基本形は、ほとんど同じで、上に十字架があるかどうかの差となっている。それらは近くの墓地で確かめられた。

神父は教会のデザインには、さまざまな注文をつけたが、信者の墓のデザインには容喙することがなかったのではないか。信者自身も墓のデザインに詳しいわけではなかったろう。結局、墓石の意匠は石工の自由な裁量にまかせられることが多かったのではないか。石工がキリスト教徒であるかどうか、あるいは外国のキリスト教の墓石に詳しいかどうかも不明である。おそらく、石工のこれまでの経験にもとづきながら、作りやすくさらには利益を生む形へと収斂していったのではないか。その中でハス（図31[76]）、唐獅子（図32[77]）、雷文（図33[78]）なども散見する。これは石工の感覚によるのだろう。

墓の文様のもつ意味

『シルロード　華麗なる植物文様の世界』「パルミラの植物文様」に、

> シリア砂漠のほぼ中央に位置するパルミラは紀元後一～三世紀にその最も繁栄したオアシス都市である。長い過酷な旅をしてきた隊商たちは緑なす棗椰子畑に囲まれた街を見てどんなに心躍ったことであろうか。そびえ立つ公共建築には葡萄唐草、アカンサス、ロゼッタなどの植物文が刻まれ、華やかな彩りをそえていた。
>
> 街の郊外にはパルミラの人たちが「永遠の家」と呼んだ墓が築かれたが、その内部の装飾も植物で満たされていた。厳しい気候の土地であるからこそ、死後の世界も心安らぐ植物に囲まれていたいという願いであったのかもしれない[79]。

とある。

ここでいう、「「永遠の家」と呼んだ墓が築かれたが、その内部の装飾も植物で満たされていた。厳しい気候の土地であるからこそ、死後の世界も心安らぐ植物に囲まれていたいという願いであったのかもしれない」という考察については疑問に感じるところも少なくない。

「厳しい気候の土地」だから「心安らぐ植物に囲まれていたい」と述べるが、厳しい気候でないところには植物文様は少ないのだろうか。必ずしもそうではないだろう。また、死者は本当に「心安らぐ植物」を求めていたのだろうか。

ここにみえる「アカンサス」については、すでに考察を加えた。葡萄唐草の「ブドウ」についても考察した。また「唐草」はパルメットやロータスと関連がある。ロゼッタ（ロゼット（rosette））は、「円花文様。開花した花を真上から見たように、円の中心から放射状に花弁を配した文様。古代においてはエジプト、アッシリア、ギリシア、ローマの建築や陶器に装飾され、初期キリスト教時代の石棺には十字、キリストのモノグラム（ＸＰＩ）とともに彫刻された。太陽の象徴とも関連があるといわれる。中世ロマネスク、ゴシック建築では天井や壁面の錨飾りとして用いられた。そこでは花弁だけではなく樫や楓の葉もデザインされた。花弁の葉の数は三、四、五、六、八、一〇、一二、一六であらわされるのが一般的[80] 」とされている。ただ、リイグルはロータスの変形としている。

また同じく『シルロード　華麗なる植物文様の世界』「墓の内部の植物文」に、「東南墓域では1990年から奈良県立橿原考古学研究所を中心とする日本の遺跡調査団が発掘を行っている。これはＦ号墓と呼ばれる地下式墓地の側面を飾る唐草文である」とみえ、パルメット様の花と蔓草のあわさった唐草文の写真（図34[81] ）が載せられている。その花の部分は少し変化しているがパルメット文にみえる。つまり、ここでは墓の内部の植物文様として、パルメット文が使用されているのである。

調査地点は、以下の通りである。

墓地A　カトリック出津（しつ）教会野道共同墓地　（長崎県長崎市西出津町2633）

墓地B　跡次教会（長崎県南松浦郡新上五島町跡次）の墓地

墓地C　江袋教会（南松浦郡新上五島町曽根郷字浜口195−２）の墓地

墓地D　田平天主堂（田平カトリック教会長崎県平戸市田平町小手田免19）の墓地

墓地E　黒島天主堂（長崎県佐世保市黒島町3333）のカトリック共同墓地

参考

墓地F　南禅寺墓地（長崎県佐世保市黒島町）

石材店（佐世保市黒島町宝亀石材）

墓地は調査した教会に隣接するカトリック墓地である。墓地に名がつけられている場合は、その名を記した。参考として、佐世保市黒島の仏教寺院の墓地と、同島にある宝亀石材店をとりあげた。黒島にはカトリック墓地と仏教の墓地が存在するが、いずれの墓石も同石材店で制作されていると思われるからである。キリスト教の墓石ではあるが、仏教式の墓石に近似するものがあるのは、同じ石材店で作られているからだろう。ただ、墓石には年代による相違があり、明治のものと最近のものとはかなり、異なっている。

長崎・福岡　調査地点・日程表

2011	市・郡	調査地点
9月18日	長崎市	１グラバー園　（長崎県長崎市南山手町８－１）
19日		２黒崎教会堂（長崎県長崎市上黒崎町26、大正９（1920）年２月設立/設計:不詳/施工:川原忠蔵/煉瓦造、平屋、桟瓦葺/532㎡、柱頭飾:有[82] ） ３出津教会堂（長崎県長崎市西出津町2633、明治15（1882）年３月15日献堂式、明治24（1891）年増築、明治42（1909）年増築/長崎県指定文化財/設計:ド・ロ神父:施工:ド・ロ神父/煉瓦造、平屋、桟瓦葺/436㎡、柱頭飾:無[83] ） ４カトリック出津教会**野道共同墓地　（墓地A）** ５大野教会堂（長崎県長崎市下大野町　明治26(1893)年竣工/長崎県指定文化財/設計:ド・ロ神父/施工/ド・ロ神父/石造、平屋、桟瓦葺/133㎡[84] ） ６殉教者茂重翁之碑 ７神ノ島教会堂（長崎県長崎市神ノ島町２－148、明治30（1897）年12月８日献堂式/設計:デュラン神父設計案/施工:不詳/煉瓦造、平屋、桟瓦葺／290㎡、主廊部:板張4分割リブ・ヴォールト天井、側廊部:板張４分割リブ・ヴォールト天井/柱頭飾:有[85] ）
20日	五島市	８五島観光歴史資料館（長崎県五島市池田町１－４） ９堂崎教会堂 日本二十六聖人（堂崎天主堂キリシタン資料館）（長崎県五島市奥浦町２０　明治41（1908）年５月10日献堂式、大正６（1917）年６月改修/長崎県指定文化財/設計:不詳/施工:鉄川与助/煉瓦造、平屋、桟瓦葺、256㎡/主廊部:漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井、側廊部:漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井、柱頭飾:有[86] ）

		10 水ノ浦教会堂 被昇天の聖母（長崎県五島市岐宿町岐宿1644、昭和13(1938)年５月11日献堂式/設計:鉄川与助/施工:鉄川与助/木造、下見板張、平屋、桟瓦葺/349㎡/主廊部:漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井、側廊部:漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井/柱頭飾:有　正面玄関の頂部には緩やかな尖頭アーチと反転曲線とを混用した装飾があり、その頂点に三葉の飾りが付されている[87]）
21日	五島市・南松浦郡	11 奈留教会　聖フランシスコ・ザビエル（長崎県五島市奈留町浦395）（昭和36（1961）年建立）[88] 12 江上教会堂　聖ヨゼフ（江上教会）（長崎県五島市奈留町浦395）（大正７（1918）年３月８日設立/設計:鉄川与助/施工:鉄川与助/木造、下見板張、平屋、桟瓦葺/166㎡/主廊部:漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井、側廊部:漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井/柱頭飾:有[89]） 13 福見教会堂　聖フランシスコ・ザベリオ（長崎県南松浦郡新上五島町岩瀬浦郷29、大正２(1913)年４月29日献堂式/設計:不詳/施工:不詳/煉瓦造・鉄筋コンクリート造(内陣部)、平屋、桟瓦葺/242㎡/主廊部:板張折上天井(格縁有)、側廊部:板張折上天井(格縁有)/柱頭飾:無[90]） 14 中ノ浦教会堂　童貞聖マリア（長崎県南松浦郡新上五島町宿ノ浦郷中ノ浦、大正14(1925)年８月献堂式/設計:不詳/施工:不詳/木造、下見板張、平屋、桟瓦葺/218㎡/主廊部:板張折上天井(格縁有)、側廊部:板張折上天井(格縁有)、祭壇部:リブ・ヴォールト天井/柱頭飾:有[91]） 15 跡次教会（長崎県南松浦郡新上五島町跡次）（昭和７（1932）年創立、昭和59（1984）年現在の教会に[92]） 16 **墓地　（墓地B）**
22日	南松浦郡	17 旧鯛ノ浦教会堂　聖家族（長崎県南松浦郡新上五島町鯛ノ浦郷326）（明治36（1903）年４月祝別/設計:不詳/施工:野中組請負/木造・煉瓦造（玄関部）、下見板張、平屋、桟瓦葺/200㎡/主廊部:漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井、側廊部:漆喰仕上げ４分割リブ・ヴォールト天井/柱頭飾:有[93]） 18 若松・大浦教会（長崎県南松浦郡新上五島町宿ノ浦郷大浦）（昭和元（1926）年創立、昭和20年代、民家を借りて聖堂に[94]） 19 頭ヶ島教会堂　聖ヨゼフ（長崎県南松浦郡新上五島町）（大正８（1919）年５月竣工/設計:鉄川与助/施工:鉄

		川与助/石造、平屋、桟瓦葺/139㎡/板張折上天井　持送りの三角形の部分や天井折上部分、および板張平天井部分には花柄を基調とした装飾が施されている。それらは持送りの曲線ともうまく調和し、堂内は華やいだ明るい雰囲気に満ちている。各部に施された花柄の装飾は鉄川与助の設計した他の教会堂にもよく見受けられる[95] ） 20 青砂ヶ浦教会堂　聖ミカエル（長崎県南松浦郡新上五島町奈摩郷1241）（明治43（1910）年10月17日献堂式/設計:鉄川与助/施工:鉄川与助/煉瓦造、平屋、桟瓦葺/298㎡/主部:漆喰仕上げ4分割リブ・ヴォールト天井、側廊部:漆喰仕上げ4分割リブ・ヴォールト天井/柱頭飾:有　第一層中央部の石造アーチは台座と植物模様の柱頭を有する石造円柱で支持され、柱頭の模様は今村教会堂と全く同形である[96] ） 21 江袋教会堂　イエズスの聖心（長崎県南松浦郡新上五島町曽根郷字浜口195-２）（明治15年設立/設計:不詳/施工:不詳/木造、縦板張、平屋、桟五葺/195㎡/主廊部:板張８分割リブ・ヴォールト天井、側廊部:板張８分割リブ・ヴォールト天井/柱頭飾:有[97] ） 22 **墓地　（墓地C）**
23日	平戸市	23 田平教会堂　日本二十六聖殉教者（長崎県平戸市田平町小手田免19）（大正７（1918）年10月７日竣工/設計:鉄川与助/施工:鉄川与助/煉瓦造、平屋、479㎡/桟瓦葺/主廊部:板張４分割リブ・ヴォールト天井、側廊部:板張4分割リブ・ヴォールト天井/柱頭飾:有[98] ） 24 **墓地　（墓地D）** 25 平戸教会堂　大天使聖ミカエル（聖フランシスコ・ザビエル記念聖堂）（長崎県平戸市鏡川町269）（昭和６年竣工/設計:末広設計事務所/施工:不詳/鉄筋コンクリート造、平屋/396㎡/主廊部:８分割リブ・ヴォールト天井、側廊部:８分割リブ・ヴォールト天井/柱頭飾:有[99] ） 26 宝亀教会堂　聖ヨゼフ（平戸市宝亀町1170）（明治32年１月19日設立/設計:不詳/施工:不詳/木造、煉瓦造(玄関部)、平屋、245㎡/主廊部:板張４分割リブ・ヴォールト天井、側廊部:板張４分割リブ・ヴォールト天井/柱頭飾:有[100] ） 27 紐差教会堂　十字架の称賛（長崎県平戸市紐差町1039）（昭和４年10月竣工/設計:鉄川与助/施工:鉄川与助/鉄筋コンクリート造、２階建、桟瓦葺/615㎡/主廊部:板張折上天井(格縁有)、側廊部:板張平天井/柱頭飾:有　俗に舟底天井と呼ばれる折上天井を採用し、構造材である

		柱や梁を内部空間に顕わにしているが、各格間には鉄川与助の装飾の特徴といえる花柄や木の葉模様が彩色を施されて描かれており、空間の緊張を和らげている[101] ）
24日	佐世保市	28 **石材店**（佐世保市黒島町宝亀石材） 29 黒島天主堂（長崎県佐世保市黒島町3333、明治35(1902)年 竣工／国指定重要文化財／設計:マルマン神父／施工:前山佐吉／煉瓦造、平屋、桟瓦葺／539㎡／柱頭飾:有[102] ） 30 **カトリック共同墓地　（墓地E）** 31 **南禅寺墓地（墓地F）**
25日	福岡県三井郡	32 今村教会堂　大天使聖ミカエル（福岡県三井郡大刀洗町今707、大正２（1913）年12月８日竣工/設計:鉄川与助/施工:鉄川与助/煉瓦造、平屋、桟瓦葺/640㎡／柱頭飾:有　ステンドグラスはフランス製である。植物模様の柱頭を頂く円柱の上けられた伸びやかな付柱がリブ・ヴォールト天井を支持している[103] ）

※植物文様に言及されている箇所にはアンダーラインを施した。建築に関しては細かな調査がなされているが、植物に関してはごく簡単に記されている。「三葉の飾り」、「花柄を基調とした装飾」、「花柄の装飾」、「植物模様の柱頭を有する石造円柱」、「鉄川与助の装飾の特徴といえる花柄や木の葉模様が彩色を施されて描かれており、空間の緊張を和らげている」などがそうである。植物の種類は特定されておらず、キリスト教における植物の役割についても言及がない。

おわりに

九州西部のキリスト教の教会、墓地にみえる文様を、リイグルの『美術様式論：装飾史の基本問題』にみえるパルメット文を中心にすえて考察した[104]。リイグルはパルメット文をロータスの変形したものととらえている。

> このようにスイレンはエジプトではたんなる装飾用として盛んになったのか、ある特別な宗教的意義をもったものとして発達したのかということであるが、『死者の書』に「万才　汝蓮華[105] よ、汝ネフエル・テム神の表象よ！」とあるところをみると、自ずから判断できるものである。ネフエル・テムは来世において無量の寿命をあたえる神、すなわち再生の神である。この再生の神がスイレンを花冠にしていることは、スイレンを再生の象徴とみなしたということでもある。また旭日の神ホ

ルスがスイレンの上に立っていることは、毎夜の闇を破って再生しつづける、いわば無量の寿命をもつものとしての表現であろう。

毎年沃土が運ばれ、全てを豊かにしてくれる川、母なるナイルに咲き敷きつめられた青いスイレンは、ナイルの化身ともみえたであろうし、その彼方から昇る太陽とともに一せいに開き始めるスイレンの花に、古代エジプト人は何か生き生きとした躍動的な神秘さを感じとったことであろう。

生命の源である太陽とともに咲き、開いた花はあたかも太陽の光線のように放射状となり、太陽が西にかげろうとこの花はたたむ。そしてまた翌朝、太陽とともにまた開く。いわば、生命の終焉とともに復活をこの花にみて、強い原始信仰を抱いたものと思われる。生誕のよろこび、再生のいのりを古代人はこの花に托したともいえるから、エジプト文明を飾る建築、美術、工芸様式の根本は全てここに源をもつといってもよいのではなかろうか[106]。

ロータスが睡蓮（スイレン）とよばれるのは、その花が夜、睡眠するかのように水に潜り、翌朝、また水の中から顔を出して花を開かせるからである。その植物としての特性が復活再生という宗教的な意味に重ね合わされた。「エジプト文明を飾る建築、美術、工芸様式の根本は全てここに源をもつ」とされている。その装飾文様は世界の各地に広がった[107]。リイグルは、そのヨーロッパへの伝播を丹念に跡づけている。文様は、たんに美しいから、あるいは形が面白いから広まるわけではないだろう。そこに宗教的な意味があり、それが強力な推進力となって伝播するのだと思われる。

今回、調査した九州西部のキリスト教の教会や墓地の植物文様は、ヨーロッパのものが、そのまま入ってきているものもあれば、日本で作られ、微妙に変化しているとみなせるものもあった。キリスト教と復活は切り離すことができない。黒島天主堂近くのカトリック墓地には「復活の日を待つ（図35[108]）」と記されていた。しかし、復活のシンボル（Auferstehungssymbolik[109]）とされるものの中には、なぜかパルメットもロータスもユリも入っていない。けれども、古代より連綿とつづく、その装飾文様の底流に、復活のイメージをみてとることができるのではないだろうか。

※拙稿は、サントリー文化財団研究助成、人文科学、社会科学に関する研究助成、代表東京農業大学　山口裕文　研究課題名「照葉樹林文化要素としての癒し植物に関わる文化多様性をめぐる研究」の助成による研究成果の一部である。

注

1　サントリー文化財団研究助成、人文科学、社会科学に関する研究助成、代表　東京農業大学　山口裕文　研究課題名「照葉樹林文化要素としての癒し植物に関わる文化多様性をめぐる研究」の助成による調査。主な参加者は、山口裕文（大阪府立大学名誉教授、東京農業大学教授）、金子務（大阪府立大学名誉教授）、大野朋子（大阪府立大学生命環境研究科助教）と大形徹。

2　長広敏雄訳、座右宝刊行会、1942。新版は、アロイス・リーグル著、長広敏雄訳『美術様式論』岩崎美術社、1970。

3　『世界の文様２エジプト・ギリシア・ローマ・メソポタミア』青菁社、1985、５頁、挿図３は図１の上の部分、挿図４は図１の右の部分にあたる。

4　同上。

5　『美術様式論』Ⅲ植物文様の始元と唐草文様の発展、96頁、第23図

6　同上。

7　現在では、リーグルのこの考え方が、そのまま認められているとはいえず、文様関係の各種の説明は、それぞれ異なっている。

8　図２の一部分。

9　三沢博昭『三沢博昭写真集大いなる遺産　長崎の教会』、智書房、2000年、58頁。

10　同上。

11　ハンス・ビーダーマン著、藤代幸一［ほか］訳『図説　世界シンボル事典』八坂書房、2000年、458頁。

12　同上。

13　前掲、注３。

14　エジプトのパルメットの一例としてあげた。香水瓶　第18王朝（紀元前1570年頃～紀元前1293年頃）アラバスター、象牙、金。新規矩男編著『カイロ美術館』、世界の美術館5、 講談社、1968年、118頁。

15　Ｇ．ハインツ＝モーア著『西洋シンボル事典―キリスト教美術の記号とイメージ』、八坂書房、2003年、265頁、「復活のシンボル」を参照。

16　高見堅志郎監修、青菁社、1985年。

17　前田泰史『写真集 長崎の教会』海鳥社、2011年。

18　同238・239頁の教会堂の所在地一覧。

19　助野健太郎、山田野理夫編『キリシタン迫害と殉教の記録』星雲社、

20　前掲『三沢博昭写真集大いなる遺産　長崎の教会』176頁、第４章　棟梁建築家鉄川

与助。以下の部分も同じ。

21　神ノ島教会。撮影大形徹。以下、教会の写真撮影については許可を得ている。

22　ミシェル・フィエ著、武藤剛史訳『キリスト教シンボル事典』、白水社、2006年、72頁。

23　同上。

24　ビーダーマン著、藤代幸一監訳『世界シンボル辞典』、八坂書房、2000年、369頁、ブドウ酒。

25　同上、370頁。

26　同上。

27　同上。

28　黒崎教会。撮影大形徹。

29　前掲『世界シンボル辞典』297頁、ナツメヤシ。

30　同上、91頁。

31　黒崎教会のソテツ。撮影大形徹。

32　山口裕文氏よりうかがった。

33　前掲『西洋シンボル事典―キリスト教美術の記号とイメージ』、248頁。

34　『祈りの島五島列島　ロザリオロード　五島教会　キリシタン巡礼道　巡礼スタンプ帳　長崎巡礼センター公認』と題するスタンプ帳。奥付はないため、発行所、出版年月日ともに不明。もうひとつ、同名で「長崎巡礼センター認可」となっているものがあり、おそらくこの方が新しいが、バスチャン伝説の部分は省略されている。現地を案内してくださった方にもおうかがいした。また片岡弥吉『かくれキリシタン：歴史と民俗』日本放送出版協会、1967、ＮＨＫブックス56にも紹介されている。

35　前掲スタンプ帳、「長崎巡礼センター公認」の10頁。

36　同上。

37　同上。

38　長崎県五島市池田町１－４　。

39　福江市蕨町細石流。昭和44年に廃止、現在は廃屋となっている。

40　模写。花びらは白、葉は緑に塗られている。

41　浜串教会内に置かれていた『巡礼スタンプ帳』二種。

42　大野朋子氏の報告による。

43　峰脇英樹氏の写真による。上五島地区カトリックセンター（青方教会）。

44　『西洋シンボル辞典―キリスト教美術の記号とイメージ―』八坂書房、2003年、１頁。

45　堂崎天主堂の柱頭。鉄川与助氏の設計。

46　頭ヶ島教会堂。

47　同。

48　前掲『世界シンボル辞典』201～205頁、十字／十字架〔独〕Kreuz,〔英〕cross

49　長崎市勝山町30番地１

50　http://www.nagasaki-tabinet.com/photolib/image/num/K1003703.html　長崎観光ポータルサイト　長崎旅ネットに紹介される「サント・ドミンゴ教会跡資料館（花十字紋瓦)」(写真使用許可申請済)。

51　森護『ヨーロッパの紋章・日本の紋章』、河出書房新社、1996年、78頁所引。

52　前掲『西洋シンボル辞典―キリスト教美術の記号とイメージ―』154頁、10 クローバー十字。

53　同20 トロース十字（トゥールーズ十字)。

54　同９ 錨十字。

55　同、20 トロース十字（トゥールーズ十字)。

56　同、９　錨十字。

57　講談社版『世界の美術館　エルミタージュ美術館』1969、19　天幕の布部分　前５－４世紀。

58　前掲『ヨーロッパの紋章・日本の紋章』78頁。

59　前掲『ヨーロッパの紋章・日本の紋章』図34　久留子および十字紋、12。

60　前掲『ヨーロッパの紋章・日本の紋章』88頁。

61　同155頁、１、４本の輻の車輪十字。

62　松村一男、渡辺和子編『太陽神の研究』上巻、「メソポタミアの太陽神とその図像」、リトン、2002年。

63　同156頁。

64　同上。

65　同154頁。

66　同上。

67　平戸　田平教会堂の墓地。

68　現地では、潜伏キリシタンと隠れキリシタンとは用語が厳密に区別されている。われわれのイメージにある隠れキリシタンのことを潜伏キリシタンとよぶ。なお拙稿の表題は発表時に山口裕文氏に与えられたものであるため、そのまま用いた。

69　カトリック出津（しつ）教会野道共同墓地。

70　跡次教会の近くの墓地。

71　同。

72　黒島天主堂近くのカトリック共同墓地。

73　村田京子氏にいただいたフランスの墓地の写真。正面はバルザック（Honoré de Balzac　1799～1850）のもの。後方に墓石の上に載る小さな十字架がいくつかみえる。

74　田平教会堂　墓地。

75　佐世保市黒島町宝亀石材のパンフレット。

76　黒島天主堂近くのカトリック共同墓地。

77　田平教会近くの墓地。唐獅子、牡丹と唐草。

78　黒島天主堂近くのカトリック共同墓地。

79　古代オリエント博物館編、山川出版社、2006年、41頁。

80　『世界の文様１　ヨーロッパの文様』小学館、1991年、228頁、鶴岡真弓執筆の用語解説、ロゼット。

81　前掲、41頁。

82　前掲、三沢博昭『三沢博昭写真集大いなる遺産　長崎の教会』、解説、226頁を参照し、必要事項のみあげた。教会の名称は微妙に異なる場合があるが、この解説の名称にしたがった。ただし、現在とは住居表示が異なるものもあるため、それは変更した。また年号には西暦を加筆した。以下の引用も同じ。

83　同224頁。

84　同225頁。

85　同226頁。

86　同214頁。「堂崎天主堂キリシタン資料館」の部分は、現地調査にもとづき、付加した。

87　同222頁。

88　http://www.city.goto.nagasaki.jp/pc/sekaiisan/goto_churches/naru/index.html　五島市役所「五島を世界遺産の島に！長崎の教会群とキリスト教関連遺産」を参照。建築に関する詳細なデータは不明。

89　前掲、三沢博昭『三沢博昭写真集大いなる遺産　長崎の教会』219頁。

90　同217頁。

91　同221頁。

92　現地の案内板より。

93　前掲、三沢博昭『三沢博昭写真集大いなる遺産　長崎の教会』218頁。

94　現地の案内板より。

95　前掲、三沢博昭『三沢博昭写真集大いなる遺産　長崎の教会』217頁。

96　同215頁。

97　同213頁。

98　同209頁。

99　同211頁。

100 同208頁。

101 同209頁。

102 同207頁。

103 同228頁。

104 リイグルはパルメット文をロータス文様の変化形ととらえている。しかし、他の文様関係の書ではパルメット（palmetto）をパーム椰子にもとづく文様とみなすものもあり、それもまちがいではない。また、ここでいうパルメットをロータスと呼ぶ場合もあり、名称には相当、混乱がある。

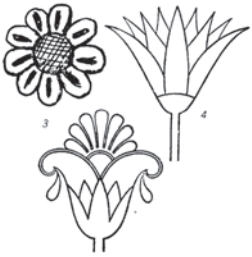
105 翻訳ではロータスは、スイレンなのか、ハスなのか、よくわからないことが多い。この場合は、明らかにスイレンのことであるが、訳文は「蓮華」となっている。

106 阪本祐二『蓮』法政大学出版局、1977年、74、75頁、スイレンの意義。

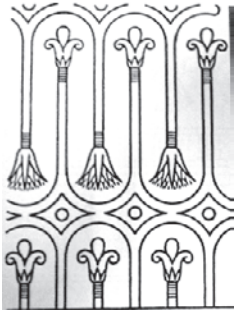
107 日本道教学会第57回大会、2006年において、「「芝」とは何か―パルメット文様の考察を通して―（大形徹）」という発表を行い、中国の仙薬、芝草（霊芝）の淵源がエジプト伝来のパルメット文に関わるのではないかと論じた。中国の初期の仙人は死者が復活再生したようにみえる尸解仙である。

108 黒島天主堂近くのカトリック墓地。

109 前掲『西洋シンボル事典』265頁。



１　ロータス



２　パルメットと側面形ロータス

５　エジプトのパルメット香水瓶　第１８王朝（紀元前1570年頃～ 紀元前1293年頃）象牙

３　パルメット（拡大）

21　中央アジアパジリクのパルメット　紀元前5-4世紀

４　旧野首教会　1908年　上部にa百合十字、左右にb百合。百合はパルメットに似る。天主堂の上のc文様はパジリクのものに酷似。

a百合十字

b百合

c文様

17　花十字（百合十字）1608年頃　長崎旅ネット「サント・ドミンゴ教会跡資料館（花十字紋瓦）」（写真使用許可申請済）

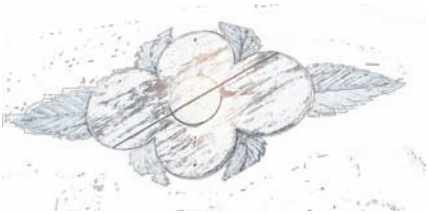
15　頭ヶ島教会堂　板張り天井　1919年　百合十字を二つ組み合わせたもの

６・７（拡大）　グラバー園の旧三菱第2ドックハウスの鋳物製の暖炉

10　黒崎教会のソテツ
（シュロ＝ナツメヤシの代用品）

８　神ノ島教会堂
内陣のブドウと
コムギ

９　黒崎教会の内陣の
シュロの木彫と百合十字



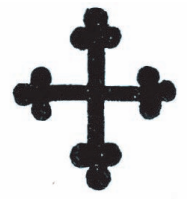
11　細石流教会　椿十字型とされる木製

13　ロザリオ　青方
教会
峰脇英樹氏撮影

14 アカンサスの柱頭
堂崎天主堂

16　ロゼッタ　頭ヶ島教会堂
板張り天井　1919年　二重に
なっている

12　巡礼スタンプ帳二種　上「長崎巡礼センター公認（旧版か？）」にあった、赤い椿の花模様、椿のバスチャン伝説などの説明と椿の写真が、下「長崎巡礼センター認可（新版か？）」では消されている。



18　クローバー十字

19　トロース十字
（トゥールーズ十字）

20　錨十字

22　『紋章学辞典』

23　花轡久留守

24　平戸　田平教会堂の墓地。墓石の上に十字架が載る

25　跡次教会
（上五島町）の墓
丸石を十字型に並べている。

26　同。丸石を十字型に並べている。

27　黒島天主堂
カトリック共同墓地

29-a 植物文様が十字架を囲む

28 フランス Honore de Balzac 1799～1850の墓。
後方の墓石の上に十字架が載る

29　田平天主堂
墓地

29-b コムギとブドウ

30　黒島町宝亀石材のパンフレット。和式角揃え、カトリックたて十字架型といった区別がある。

33-a 上部の百合十字
33　黒島天主堂
カトリック共同
墓地　雷文

34　シリア　パルミラ
墓の内部の植物文様、
唐草文とされるが、パル
メッ形である

31　黒島天主堂　カトリック共同
墓地　十字架とハス

31-a 拡大

32　田平教会
近くの墓地

32-a 上部の百合十字

32-b　唐獅子、牡丹と唐草

35　黒島天主堂カトリック共同墓地
復活の日を待つ